

東京帝國大學教授
工學博士海軍造兵中將

有坂 鋁藏 著

象 の 欠 呻

象の欠呻

はしがき

私は少年の頃、従兄と兄とに連れられて、箱根の湖畔に一夏を送ったことがある。ある日、山越えをして伊豆山に遊んだ。途中幾多の山坂を越えて、鬱葱たる老樹の下を過ぎたり、羊齒や青苔の覆ひ重なる清流に沿うた谷の細道や、一望秋草のみ茂る山道を辿ったりして、やがて日金山にかかった。暫く山坂を登つて行くと、急に行く手がぴかっと白く輝いたのに、はつと驚かされた。吾々は既に十國峠の絶頂にゐたのであつた。涯しもない大海原の一孤島には、白波が吹雪のやうに打ち寄せて屠る。その大自然の美しさ、子供心にも少からず感動したと見える。「あの島は何」かと、突然荷物持の老爺に尋ねたことを、今も明かに記憶してゐる。其の時不意に海を見た嬉しさは到底忘れることは出来ない。

「箱根路を我が越え来れば伊豆の海や、沖の小島に浪のよるみゆ。」と詠めた昔の歌人も、やはり同じ嶺のあたりで、同じ感激を以てあの海を見たのではあるまいか。私とその海を見た時の第一のインプレッションは、折々私の頭に、昔の美しい夢のやうに心地よく浮ぶ。歌人も、その時の最初の印象が、其のままあの美しい歌になつたのではなからうか。

同じ頃のある夏であつた。那須の温泉に浴した時、毎朝食事の散歩の途中、桔梗・女郎花・がんび・竜胆など美しい野の花を、束にして売られる可憐の子供に出會つた。その愛らしい呼び声、純朴な顔付、飾氣のない姿が、露を帯びて生々とした野草の色香と共に、私の心の底に、如何に忘れ難い感じを残したであらう。自ら見聞して深く心に感じたことは、この健忘症の私でさへも忘れられない。幼時の出来ごとまでも、昨日のことのやうに、新しく頭に浮んでくる。かうして私の見、聞き、或は感じた事実を、記憶を辿り、日記から拾ひ集めて、戯れに此の小冊子を書いて見た。文學に関しては、全くの門外漢の著述であるから、文

字の拙陋、史實の誤謬などは極めて多いことであらう。此れ等の点については、讀者諸君の御諒察と御教示とを懇ろに仰ぐ次第である。

著者しるす

象の欠伸 目次

一 幼時の家	一
二 夜戦	六
三 雪	八
四 月	一二
五 花	一六
六 カイゼル	二〇
七 裾野の秋	二三
八 宿直	三〇
九 世田ヶ谷御所	三三
一〇 恐縮	四一
一一 結婚式	四五
一二 平泉	五六
一三 後方勤務	六七
一四 礪波山	七八
一五 下の部屋	八八
一六 演能回顧	九三
一七 俘虜	九八
一八 林檎畑	一〇一
一九 古砲	一〇九
二〇 我が北英の住居	一一八
二一 金崎宮	一二七
二二 大學のほとり	一三三

二三	妓王寺	一四二
二四	鴨猟	一五〇
二五	炎熱	一五七
二六	安土山	一六三
二七	莊嚴なりしこと	一七二
二八	保津川	一八〇
二九	郊外電車	一八七
三〇	音戸	一九二
三一	櫻草狩	二〇四
三二	柳の御所	二一〇
三三	舊都	二一七
三四	大堂	二二七
三五	斗南半島	二三五
三六	玉	二四九
三七	升形山	二五五
三八	深大寺	二六三
三九	治大夫堀	二七一
四〇	武蔵野	二七九

目次(終)

象の欠伸

小象生

幼時の家

銀冠ぎんくわんを戴いたく王者わうしやの如ごとき群青色ぐんじやういろの富士ふじの姿すがた、朱色しゆいろに高たかく昇のぼる裾野すそのの山火やまび、金剛石こんがうせきの如ごとく朝日あさひに輝かがやく千貫樋せんくわんどひの氷柱つらら、雑木林ざふきはやしを抽ぬんで碧空へきくうに聳そびゆる頼朝よりともの旗掛松はたかけまつ、三島街道しまかいだうを悠々いゆういゆうと流ながれる水晶すゐしやうの如ごとき清水しみづ、あこれらは忘れ難わすれがたい私わたくしの幼時えつじの記憶きおくである。幼をさない時とき住すみなれた家の

近傍は、如何にも懐しいものである。

先づ南、庭を隔てて向ふには、紫紺色の香貫山が牛の背のやうに見えて、其の前には、薄緑の丘陵が続く。丘の脊には、松並木が馬の鬣のやうに、山の高低に従つて、整然と並んで居る。私はいつでも、乳母の背で、干本松原の穏かな子守唄を聞きながら此の並木を見詰めて居ると、何とも言はれぬ長閑な氣持になつて、いつの間にか眠つてしまつたことを覚えて居る。

北側には池があつて、夏の初には、白や紫の燕子花が咲く。塀を隔ててその向ふには、雪を載いた紫の富士が、見上げるやうにぬつと姿を現はして居る。遠く東西に曳く裾野に、森や野や村落が豆のやうに見える。

或る日兄が下男に連れられて、愛鷹山へ馬追を見に行つたことがあつた。夕暮になつても帰りがなく、日は既に西に落ちかかつて、紫に見えた富士や裾野は、次第に黒すんで來た。其の時山の中腹に二三個所の火の手が揚り、煙は焰に映つて、朱色に高く立ち昇つた。青黒い山、赤黄色い火、黒ずんでくる空などが、何となく淋しく思はれて、兄の帰りの遅いのが氣遣はれて來た。併しいつの間にか乳母の背中で眠つてしまつた。目が覺めた時には兄はもう歸つて居て、馬追や山の景色のことなどを、面白さうに母に話して居た。山の土産の蕨や躑躅、美しい草花などが沢山にあつた。

邸から半町ばかり向ふに静かに流れる清水を前にした茅屋根の蕎麦屋があつた。文藏と云ふ親切な爺と美しい三毛猫が屠たので、折々下女に連れられて行つて日向で猫と戯れた。ある時あまり耳を引っ張つたり、尾を握つたりしたので、右の手を引っ搔かれ、それから私は猫が大嫌いになつた。此処から程近く泉と云ふ処がある、其処には大きな池があつて、清水が滾々と湧き、付近の農家の鶏の声や水車の睡さうな音が聞えて來るなど、懐かしく平和な天地である。ここに池邊に若草が萌えて、其の間から草木瓜が朱色の愛らしい花を出す頃の長閑さは言語につくされない。

夏になると、雲のやうに真白な卵の花が、人丈位の小さな瀧を兩岸か

ら挟んで、其間に飛泉が、勢よく迸る。岸の際や、小川の兩岸の岩間には真緋の躑躅が点々と咲き始め、水車小屋の辺りからは、のんびりとした米搗き歌や、牛の鳴声がかすかに聞えて来る。四五歳から十歳位までの子供等が赤裸で、透き通る清水の中で笹を持つて小魚を追い回す。

此の泉には富士がすがすがしい影をさかさまに映す。秋の冴えた空の日には殊に美しい。又高い岸から懸崖の合歡の木が、淡紅のふつさりとした花と睡たさうなをつとりとした葉を水に映すのも、如何にも上品に見える。此の辺には源平時代の史跡が多い。邸の直ぐ前には陣屋と云ふ処があつて、長澤の清水八幡宮が木立の中に見える。此の社の杜家の傍にある桑畑の角に、石の玉垣に囲はれた小さな柿の老樹があつて、樹下に苔蒸した古い腰掛石がある。治承の昔、頼朝が黄瀬川の東岸に陣をとつた時、弟の九郎が遙々奥州から上つて、絶えて久しい対面をなし、平家征伐の相談をしたのは此の処である。其の時義経は柿の簀を食つた後種を捻つて捨てたのが地から生えて此の柿の木となつた。それから此の柿を捻り柿と唱へて年々実を結んであるといふ面白い伝説がある。又此の辺に、頼朝の旗掛松と云ふ大木が空に聳えて、私の幼時には部屋の窓から此の松を眺めて、小さい頭にも何となく崇高の念が起されたのに、惜しい哉いつの嵐にか吹き倒されて、今では見る事ができない。

石田と云ふ処に、亀鶴山と云ふ観音堂がある。ここには建久の昔富士の巻狩の折、曾我兄弟が工藤経の館に討入つた時、そこに居合せたと云傳へる白描子亀鶴の古墳がある。三島に近い伏見の里の傍には、千貫樋と云ふ名高い水道がある。厳冬になると、此の樋から鐘乳垂のやうな大きな氷柱が下る。これが朝日に映じて、金剛石か、水晶のやうに七色を鮮やかに放つ様は、此の濁世の景色ではない。

伏見の宿には大きな牡丹餅を売る其頃七十位の親切な婆さんがあつた。其の牡丹餅は、幼時の私には何も云えない美味であつた。私は毎朝、日の出の頃の食前の散歩に連れて行かれたり、女中に負ぶさつて、三島の宿へ行つたりする毎に、此の餅屋に休だことを覚えて居る。かうした家は今はどうなつたであらう。

夜 戦

床に就いて間もなく、夢とも現とも解らぬ中にあたりが何となく騒々しく半鐘の音が人声に混つて聞こえて来た。火事かと思つて書斎の窓を開けて南の空を見ると、遙かに九段の方面に赤黄色い火の手が揚がつて居る。その影が庭の池水に映り、照り返して植木や石燈籠、屋根瓦、雨戸、池の石橋などが赤く見える。半鐘は三つぱんを打つ、人声も遠くでする、子供心に何だか物凄いやうな気分がした。

父が二階の窓から見て居たが、やがて下りて来て、これはただの火事ではないから、外には出るなと云つたので、皆何事だらうと驚いた。父は言どうしても戦争らしいと云ふ。私運はなぜ通常の火事と違ふのか解らなかつた。父は瀕にしてあの音を聞けと云つた。成る程、変な音がする。人声の中にはちばち豆でも煎るやうな音が盛に遠くで聞える。父が言ふには、あれは小銃を発射する音だ、どうしても戦争らしいと、そこで初めて尋常の出来事でないことが解つた。火は中々消えない。池の水は真っ赤に光る。近所の家の屋根も照り返して善く見える。窓によつて見て居ると、一軒置いて隣の家の雨戸が開く音と話し声がする。同時に玄関の辺りが明るく見え、靴や剣の音が聞えて、武装した人が出て行つたやうであつたが、再び戸がしまつて、あたりはしんと静になつた。ぱちぱち言ふ音は益々盛になつて、大分近づいてきたやうであつたが、やがて止んだ。火の手も漸く収まつて、一体にひつそりとなつたので、また床に潜りこみ、いつの間にか眠つてしまつた。

翌朝早く起き出て見ると、昨夜の騒が善く解つた。中坂の途中で老人が流弾に中つて重傷を負つたとか、九段で士官が怪我をしたとか、噂は区々であつたが、果して父が言つた通り戦争であつた。或は戦争と名付けるのは不穩当かも知れないが、兵隊一揆の争乱で、西南戦争の行賞の

不平から起こった竹橋騒動であつたのである。家事の最中に近所から剣をがちゃがちゃやつて、靴音高く出て行つたのは、一軒置いて隣の乃木さんであつた。

雪

私が佛國の北部ノルマンデーのル・アール市に留学して居た時であつた。頃はクリスマス前後であつたと記憶する。或寒い日の夕方、宿から七八町もある海岸に住んで居る友人を訪門した。暖炉をはさんで、故國のこと、学校の話、最近巴里での見聞其の他の時事問題などに関して、話はコニヤツクやベネチクチンの蒸氣と共に段々はずんできて、屋外の寒気などのことはすっかり忘れ、愉快な炉辺の一夕を過した。

ル・アールは海岸の風景が非常に美しい処、殊に夏季は海水浴が盛んで、沸人ばかりでなく、諸國から紳士淑女が雲霞の如くに集つて来る。昼は目の覚めるやうな派手な服装の婦人や、愛らしい子供等が、海岸通りから波打ち際にかけて一杯に遊んで居る。夕方から夜になると納涼客が澤山に出かけて、海岸はノルマンの造船所の辺からサンタドレスの丘の上まで中々賑わつて、カツフェーやカジノウは満員の姿である。

夏の全盛にひきかへて、冬は實に憐れげにさみしい。夜も遅くなると、港に近い処はまだしもだが、海岸から市中の辺にかけては、人通りが絶えて、古代の市街の遺跡でも通るやうな気がする。私は十時過に友人の家を辞して帰途に就いた。家を出て見ると、驚いた。いつの間にか屋上地上一面に真つ白に雪が積もつて、北海から吹上げる烈風に捲き上げられる吹雪が顔と云はず、外套と云はず、どンドン横から吹き付けて瞬く間に体中真つ白のなつた。

私は外套の襟を立て顔を覆つて早足で宿の方に向つた。海からは怒涛の寄せる音がごうごうと物凄く聞こえ、風雪は益々激しくなつて息もつ

けない。やがて三四丁程も来たが人っ子一人にも逢はない。耳や手足の先が切れさうに冷い。詩や文章では北欧の風雪の様を読んだことはあるが、実験したのは今夜が初めてである。ノルマンデー辺の吹雪は想像以上に恐しいものと覺つた。市庁の前の小公園の門まで来た。樹木や建物は吹雪のためにほとんど見えない。私は靴の裏に余り雪が着いて歩きにくいから、門の脇にある腰掛の臺で雪を落として行かうと、其の側に来ると、びつくりした。何だか真白な物が臺の上でぶるぶる動いて居る。

よく見ると一人の若い婦人が十二歳位な幼児を抱いて頭からショールを全体にかぶつて雪に埋れて居るのであつた。まだ暖炉の暖さも幾分残り、ブランデーの酔も醒めきらない私でさへも此の大雪と寒気には堪えないのに此の有様はどうしたことかと驚いた。兎に角、近よつて婦人に雪中こんな処に居るわけを聞いて見ると、憐れな女は次のやうに話した。自分は漁夫の妻であるが、夫は一週間程前に漁業に出たぎり帰つて来ない。船の消息を近所で聞いてもさつぱりわからないから、海岸ならば安否も知れようかと、行つて見たが、此の頃は沖がしけて居るので、漁船の便が一向のないとのことであつた。落胆の余り、海岸から此の辺を彷徨つて居る中に俄の大吹雪になつて、進退窮まり茫然として我知らずここに休んで居たので、未だ夕食も済まさないのとであると。

物語の事實はどうしても、私は物心がついてから十八九年の間に、こんな憐れな有様を見たことはなかつたから、少なからず動かされた。衣囊から五フランの銀貨を取り出して婦人にあたえ、兎に角街に行つて暖かい食事を済ませ、明朝また夫の消息を尋ねるやうやうに勧め、雪を打ち払つて、町口まで送つてやつた。女は啜り泣きをしながら感謝の意を述べて、悄然として残燈のある店の方へ行つた。雪は少し小降りになつたが、未だ遠方は見えない、私は憐れな女が遠く帆船のマストの林立するバスサン、ド、コンメルスの岸を辿つて行くのを見送つたが、次第に薄れ行く其の影は、終に吹雪の中に消えた。

此の辺の雪中の寒気は到底暖国の者には想像することは出来ない。青年時代の私でさへも厳しく感じた此の寒さに、營養不十分な女や乳兒な

どがどうして耐へられよう。私は今でも雪の降り積もる夜など、暖炉によつて安逸を貪るをりをりには、雪の中に動くものを見つけたその時のことを思ひ出さずには居られない。

月

布団着て寝たる姿と嵐雪が歌つた、なだらかな東山の後から、おつとりと昇る月影を、清く澄む鴨川を前に、四條あたりの涼み棚から眺め、松の樹陰から漏れ来る月光を、須磨や舞子の磯波の静に涵す白砂の上で賞観し、或は草より出でて草に入る武蔵野の月を、狭山あたりで尾花の末に望んだりするのも、夫々特殊の面白味はあるが、私が嘗て眺めた中で、どうしても忘れることのできないのは、和歌の浦の月である。

或年の八月の中旬であつた。中國から海を渡つて高松へ行つた時、屋島に源平の史蹟をたずね、宗高や景清の花やかな戦振りを偲び、菊丸や大夫黒の古墳を弔ひ、牟禮・古高松あたりに源軍の焼討を思ひなどして、又海挾を越えて和歌の浦に着いた。

玉津島明神や紀三井寺に参詣した後、海岸の白砂青松を賞観して、旅宿に帰つた。夕食後外を見ると、明月は松林の間から廣庭を二面に照して、まるで昼のやうである。此の良夜に此の良景に對していながら、さうして坐つていられやう、知らず識らずに宿を出でとある神寂びた杜の前まで來た。

月光は隈なく天地を浸し、蟲の音は叢の間から滋く聞こえて、此の盛夏の夜にも、秋の末のやうな涼しさを感じさせる。松や杉の葉は銀針をたらねたやうに光り、竹藪や雑木林は緑白の寶を置いたやうに見え、木陰にある萬年樹・棕櫚・枇杷などの葉の上には月光の漏点が数千の碧玉を並べたやうに輝く。

高い古松から下の竹に、竹から其の下の山椿にと次第に淡紫半透明の

蔭を落とし、光と影の斑点が込入って、レースか綱のやうに見える。又月光を誘ふ涼風が梢を渡る毎に、此の手に取れぬ網が、魚のかかつた時のやうに揺々と動く。霜柱のやうに盛り上つた白苔、濃緑の八目蘭、定家葛で覆はれた巨巖は、月光に映じて珠玉を連ねた屏風の如く聳えている。

ここを通り過ぎて、なだらかな阪を上ると、茅屋の点々とある処に出る。商家なども少しはあつて、夜は更ても、未だ燈火の見える家も幾らかあつた。

そこから極く緩傾斜の長い坂を下つて行くと、丘の上の方から澄んだ声で、追分節に似たた俗謡を面白く歌ふのが幽かに聞えてきた。暫し立止って聞とれていると、其の美しい声は次第に近づいて、やがて人影が一つぼんやりと、遙かに靄の中に浮んだ。

月は中天に懸かつて愈々冴え、人影は短く地上に曳いてゐる。寂然とした片田舎の坂道をただ一人玉を轉がすやうな声で歌ひつつ行くのは、月にあこがれ出た人であらうか。次第に明らかになる人影が間近く過ぎるのを見れば、白手拭を首にかけた二十前後の田舎娘であつた。悠々とし私の前を通り越し、坂道を下りながら歌う声は、嫋々と余韻を長く引いて月に達するかと思はれた。

あたりはひっそりとして、月光が茅屋や叢を一面に照らしてゐる。昼のやうな月夜、若いおんな澄み透る美音、無人界の如き静けさ、私はは眼前の有様が此の外のやうに思はれて、静寂の感にうたれた。

私は半町位も後れて坂を下りたが、ゆるゆる歌ひながら行く女の寂しい影が靄の中にぼんやり見えた。やがて二三町も離れたかと思う頃、人影は左側の竹藪に隠れて、ただ歌ふ声のみかすかに聞こえたが、之も次第にとぎれとぎれになつて、終に消えてしまつた。遙に藪の上方には紀三井寺の高い丘が靄の中に淡く浮かんでゐた。

昔狂女が三井寺の鐘楼に上つて鐘を撞いたのは、こんな夜ではなかつたらうか。面白い議論を持ち出して住僧を困らせたのは、こんな時ではなかつたらうか。斯うしたことを考えながらいつしか宿に帰つて来た。

主婦の話によると、此の乙女は近村のもので、近頃失恋のために物狂はしくなり、月の明るい夜は、いつも俗謡を歌つて此の辺を彷徨ふのである。私は月夜田舎道などを散歩する時折には、今に此の世の凄いやうな美声と、ぼんやりと見えた乙女の哀れな姿とを思ひ出さないことはない。

花

如何に各苑の花が嬋妍の美を競つても、植物園が珍奇の花卉に誇つても、果しもない廣大な天然の花園に比べては全く顔色がない。

天然の花園はどこへ行つても見ることが出来る。富士、白山、白根、立山、八ガ嶽、駒ガ嶽、御嶽などの高山には、其の氣候や地味に適した種々の美しい高根の花、が或はまばらに、或は群をなして咲き乱れて、山上に廣大な花園を見せてゐる。車百合、岩桔梗、大櫻草、石楠、深山きんばい、鬼菊、駒草、苔桃などが、偃松や梅松などに交じつて眼に余るほど一面の咲いて居るのには、エデンのそのも、遠く及ぶまいとさえ思はれる。

次第に平地に来るに従つて、愈々茫大な自然の花園がある。試みに秋の頃奥羽の原野行つて見よ、全く人口の加へられない美しい芝原が何里となく続く処がある。かかる芝原に女郎花、桔梗、男郎花、萩・鬼百合、燕子花、ぎぼし、せんづ、虎の尾、われもかうなどが密集して繚乱と咲き揃つて涯もなく続く風情には、光淋も筆を捨てるだらう。水溜りの処には、紫の水葵、雪白の鷺草、睡蓮などが妍を競つて、青い空、白い雲と共に、その影を漣かな水に映して居る。

こんな自然の樂園に来て見ると、何とも居へぬ美しさと懐かしさを感じるのである。併し花園もまだ此の位では満足が出来ない。津軽海峡を越して一步北海道の地を踏んだらどうであらう。

其の涯ない廣野や、茫漠たる山の裾野を過ぎる毎に驚喜の眼のを放つて満目の錦を賞観しないことはない。駒ヶ嶽の裾野の御花畑や輪西から札幌へ行く路をはさんだ際限のない廣大な野などは、一面花でない処はない。

或時鷺別の海岸の断崖に、大波が寄せて崩れる壯觀を眺めに行った時、この花野の美に打たれたことは、今に忘れることが出来ない。限りない茫茫とした原野に、一面にみえるものとしては、ただ紅白紫黄の花のみである。先ず近く目に入るものは金粉を盛り上げたやうな大きな反魂草や女郎花、紫に輝く燕子花や兜菊、真っ白なさびた、男郎花、われもかう紅やのみそはぎや野萩、薄紫の藤袴、釣鐘草、きぼし、虎の尾などを初め、名も知れぬ種々の花が一面に咲き誇つて居るのである。殊に黄色の花が多いので、大地の一面に金砂子を置いたやうに見える。小川の岸について行くと、砂地に愛らしい谷間の姫百合が、純白な鈴形の花を一杯に附けて繁茂して居た。

此の野にはあちこちに小川に続く水溜りがある。私はふと花の茂みを分けて、小さな沼のほとりへ出た。岸に近く二尺ばかりの船が三隻、静かな水面に浮かんでいた。舟は一面に花で包まれ、船体から、櫓から、どこからどこ迄も花でない処は無かつた。丁度四月八日の花の御堂を水に浮べた如くである。岸には四五歳から十二三歳位迄ののアイヌの子供が四五人、樹の枝でそれを動かして居るのであつた。花舟は皆夫々に美しい影を静に水に映してゐた。

此の時夕陽は西に傾いて、雲は黄色から次第に朱色に変わった。黄金のやうに輝く日輪は、淡紫の雲間から其の神々しい光線を花船や水や野に浴びせて、あたりは一面に輝いて見えた。

やがて日は雲珠の山の端に人つたので、子供等は花舟を取り上げて家路に就いた。私は暫く茫然と見送つて居たが、ふと野の真中に独り立つて屠るのに気が附いて、幽に汽笛の響く鷺別の停車場へと急いだ。残照は尚大野を照して、一面の花の色をぼんやりと見せた。野面にはアイヌの段々葺の茅屋根が二つ三つ鼠色に淡く浮かみ、鈴蘭は懐かしい香を高

く黄昏がの空に放つて居た。

カイゼル

日露戦争が済んで間もなく、某大将に従つて欧米に行つた時、一行は伯林の王宮でカイゼルに謁した。

恰も其の日は某殿下の御謁見の時であつたので、それが済む迄一回は別室で休憩した。此の室は極く質素に裝飾されてあつたが、壁には戦画があちこちに掛けられ、棚には、戦艦の模型が数多置かれて如何にも皇帝の趣味を現はして居るやうに感ぜられた。

殿下が御退出になつたので、一行は謁見室に導かれた。暫く待つ中に、正面のドアが開かれ、鼠のフロック型の長い軍服を着けた皇帝はツルムラー侍従武官を従へて、傲然と現れた。

敬礼が済んで、將軍からは來意を述べ、皇帝からは種々の挨拶があつた後、カイゼルは吾々の前に來て、一人一人に強い握手をされ、極めて巧妙な英語で、各々の職掌や、日露戦役に関する専門的の質問や、その他様々の物語があつた。

皇帝は愛嬌をたつぷり振りまかれ、質問やら賛辞やら滔々と出て、其の巧妙な応対振り、微細な注意及び博識なことなどには少からじ感服した。

私の前に來られた時は、大砲や兵器のことを詳細に話されて、終には私を日本のクルツプと呼ばれた交際振は、中々隅には置けぬ人物と思はせた。

皇帝は常に左の手を後に廻して居られた。後で聞けば、嘗て負傷のため変形して居るからだと言ふことである。此の拝謁の印象としては、帝の鋭い外交振や、何事でも研究し、知識の廣いことには、深く感服したが、併し当時有名な独逸皇帝に拝謁したにしては、何となく物足りない

やうな気がした。けれどごそれが何んであるかを考へても、容易にはわからなかつた。

勲章贈興があつて、皇帝は奥に入られ、吾々は退出した。

王宮で何だか物足りないやうな気がしたのは何であらうと、後で熟考して見ると、とうもこんなことのやうに思はれる。

奈良あたりの大伽藍に行つて金堂の須彌壇上に安置された本尊の態度を見ると、物も云はず御世辞もないが、一種犯すべからざる威厳と、堂内の萬物を慈愛擁護して其の主宰たるの相好が必ず備はつて居る。例を挙げて見ると、唐招提寺や薬師寺の本尊などは、ことに其の感を激くするものである。これは或意味に於て主宰者たるべき者の具備すべき要素を含んで居るのではなからうか。又本尊の守護佛たる神将や四天王などは、如何にも威厳のある立派なものもあるが、其の威厳は帝王や主宰者の威厳とは、どこか違つて、個人的の勇猛とか、厳格とか云ふべきものを現はして居るが如くに見える。

鼠色の長い軍服を着けたカイゼルの吊り上つた口髭や、底光りのする鋭い眼は一見人を射るやうな趣はあるが、それは本尊の如來を思ひ起させるものではなくて、四隅にある四天王を連想させるのである。

私は今度の欧州大戦の結果を見て、こんなことを考へた。若し嘗てカイゼルに謁見の当時、帝が私の心に四天王でなく、本尊の如來であるかのやうに感ぜられたならば、かうした大乱や失敗を惹き趨すことはなかつたらう。

一行はやがて欧米行きを使命を擁して帰朝した。其のとき畏くも、明治天皇、皇后陛下から御座所拜謁の榮を賜つたが、其の時にはまのあたり天照皇大神を拝する心地がして、何とも云へぬ崇高の感に打たれた。

宮城を辞して帰る途で、私はこんな世界無比の尊い陛下を奉戴して、常に其の聖恩に浴して居る日本国民は、如何に幸福であるかを、つくづくと考へた。

裾野の秋森田の月見野から鱒が澤の寂びた街道を棄てて、南の方に小道について丘を登ると、鬱蒼とした古い松林に出る。此辺から松の嵐を聞

きながら、極く綾やかな坂を五六町登ると、急に四方がからりと打ち開けて、大高原が現れる。

正面には雄大な、しかも美しい岩木山がいくつかの丘や廣野を隔て、大王のやうに碧空に聳え、恰も一種の神秘を抱きつつ、周囲の丘陵や村落、あらゆるも

のを見下して、これらを愛護して居るかのやうに思はれる。

山の頂上には極めてすどく尖った峰がある。冬が来ると真白に雪の衣を着、莊嚴な一種犯すべからざる威力を現はして大空に崎つて居る。

夏は山の頂がほ

んのりと桔梗色に見えて、裾の方へ淡紫・紫紺、紺青、緑と云ふ様に次第に美しいばかりになつて平和な尊い姿を見せる。朝、日の出る頃には満山が淡紅に見えて、据野の凡てがをつとり神話にある樂園のやうである。夕暮に空が真赤に染まる時は、山は威陽宮の火災のやうに輝き、日輪が目本海に没する頃には橙色から茜、紫、紫紺、紺と次第に変わつて、其の変化が如何にも面白い。此の美しい神秘の山は、私には何となく懐しく引き付けられるやうな感じがするが、日日これを眺めて居る津軽地方の人々にも極めて崇敬されて居るのである。

私が此山の北麓の高原に遊んだのは秋の初であつた。山は裾野を長く周囲に曳き、其の上に側斜の極く緩い、樹木のない青緑の小山が、土佐や狩野のはけでばかしたやうに、いくつも続いて居る。その中には茅屋が或は単独に、或は五六軒集まつて、頂や谷間に淡く浮んで見えるものもある。稀には頂上或は全体が森林に覆はれたものもある。それが一寸砂漠中のオアシスのやうに見える。此のオアシスの中には、田村將軍の伝説で名高い観音林などがある。

裾野の草を分けて行くと、桔梗、女郎花、尾花などが一面に咲き揃ひ、山から下す淒涼な秋風に吹かれて横にたゆんで居る風情は、絵にもかけない美しさである。浜茄子や萩紅、紫、虎の尾、藤袴の紫、鬼百合や、剪夏羅の丹朱の花が群をなして一面に咲き誇つて居るのは、目の覚めるやうな自然の錦である。

私は友人の馬車に乗つて、長平と云ふ丘へ石器時代の遺蹟を踏査に行くのであつた。溪流や沼には橋も舟もなく、馬車の儘渡つて行くので、其の震動は随分激しかつた。暫く行くと、道を横ぎつて遙に古街道の松並木と茅屋が五六軒見える。馬車を急がせて街道へ出ると、如何にも古く寂びれた村落がある、此処は弘前から鬼澤、十腰内、小屋敷、舞戸などを過ぎて鰯が澤に通ずる古道で、今は人通りが極めて少く、道路は甚だ険悪である。右になだらかな坂を下つて左に曲がると、又草の田の細道に出る。原野には一望数里、樹木も見えず人家もない、恰も砂漠の中を行く思で草を分けて進んだ。

約一里も行たかと思ふと、向から騎馬の婦人が十ばかりの少女を前に乗せて、草を分けて進んで来た。英の後からは荷物を積んだ馬が続いた。木造の町へ行くのであらう。町への土産に、秋の草花を沢山に馬に附けて行くのは、その心根も見えて美しく、床しく思はれた。

廣野の中ではこんな人にも遇ふことが極めて稀だ。只時々山籠もりの支度をした草刈や、樵夫が四五人連れ立つて山に行くのを見たのみである。

やがて長平の丘に着いた。丘は廣野の中央に立ち、谷川を前にして如何にも晴々とした処である。遙に岩木山を見れば、頂上は紫紺色に霞み、中腹以下に森が見える。森の中程から一條の白い煙が真直ぐに高く立昇つて居る。これは山籠の樵夫の焚火の煙であるとの丘には喬木が一本もなく、一面に秋草や糊うつ疏の花盛りであつた。中にも流に沿つて大きな朱色の鬼百合が沢山に咲いて居るのが、野辺を焦がす火焰のやうに輝いて見えた。

丘の頂上で馬を車から放し、紅葉した灌木に繫いだ。此の丘は一面に石器時代の遺蹟である。遺物を発掘採集したが、獲物は余り多くなかつた。併し参考となるやうな珍物もないでもない。吾々は花の中で中食を済まして、都ではとても想像にも及ばない愉快を感じた。

雲雀ここかしこに舞い上がつて、長閑な音楽を奏して居る。馬はいつの間にか綱を解いて遙か向うの丘に行つて青草を食つて居る。小川の清

水は滾々と丘の間を流れ下り、傍には野生の燕子花が紫の大きな花をつけて繁茂して居た。

太古の住民は皆風景の美しい処を好んで住んだやうだが、此の長平の丘も其の例に洩れない。私は此の廣大な自然の風景を見て恰も太古の住民となつたやうな心持がした。

西、日本海の方を見れば、日は追々傾いて来た。森田の村への帰途は遠いから、此の美しい自然の楽天地を引き揚げねばならぬので、遙か向うの丘に遊んでいる馬を牽いて来て馬車につけた。

馬車はごとごと進みはじめた。十腰内の古街道の松並木を越えると、左には狄が館のこんもりと茂つた鼻が大館沼に突出し、藤山や石榭の古蹟は夕陽を受けて鮮やかに見えた。前面には遙に遠山里や館岡辺から屏風山の低い丘続きの松林が紺色に見え、室町時代に下国の安東氏を構へて栄華を極めた十三村あたりが、ぼんやりと夕靄の間に指摘される。その背景には、日本海や津軽海峡の静な海が鏡のやうに霞の間から窺はれた。

眼を右方へ転ずると、木造・五所河原などの町が廣い水田や原野の間に見えて、あちらこちらにある人家や土蔵の白壁が夕陽に映じて、薄紅に輝いて居る。東の方は、北畑頭家の古城址のある浪岡や黒石の市街が、夕霧の中に望まれて、飯詰、大釈迦、七和辺の山々が淡紫に長く其の裾を南の方に曳いて居る。

近く森田、床舞、相野辺の茅屋から立昇る夕餉の煙は白く森の上に棚引き、ミレーの田舎の景色絵にありさうな、をつとりとして夢のやうな眺めであつた。

日は漸く日本海に没して、馬車は薄暗い松林の下を潜り、峻坂を下りて友人の家に着いた。私は岩木山麓の高原に遊んだ此の日のことを思出す毎に、恰もエデンの花園の夢のやうな美しい眺望にあこがれて、花咲く高原の中に立つて居るやうな気分になる。

宿直

木枯しがはげしく吹きすさむ寒い晩であった。丁度日清戦争の真つ最中で、予備役から召集された豪傑らしい少佐と、佛國から帰つて問もなく腕に一本の筋を付けたばかりの私と二人がその夜宿直に當つた。

事務室の薄暗い燈火の下に、大火鉢を前に茫然として、何か考へてでも居るやうな少佐の肥大な姿には、古武士の面影があつた。

封建時代の大名屋敷跡の丘上に茂る、魔のやうな槻の森に衝る風が、怪物の叫びのやうに聞こえ、枯葉が古池を越えて雨のやうに散りかかり、硝子窓をたたく音は黄海の怒濤に生死を争ふ生霊の囁きかと疑はれる。

かうした寂しい晩には、伝説で有名な此の古屋敷の恐ろしい化け猫のことなども思はれて、窓硝子を透してぼんやりと白く見える池の水や真つ黒に聳える森の方に、臆病な眼を向けたりした。工場のエンジンの音が幽かに聞こえる。

何か考へてゐるやうな君は、火箸で灰に丸を書きながら、静かな薩弁で次のやうな物語をしてくれた。

こんな寒い日には戦地に居るものはさぞつらからう、屢々戦争に行つたが、随分苦しいこともあつたと、如何にも其の時を思ひ出すやうにしみじみと話し始めた。

既に二昔に近い明治十年に、彼は海軍少尉として西南戦争に参加し、肥後某地に向かつた。其の日の戦は劇しかった。銃砲の聲は耳をつんざき、砲煙は天目を暗くした。敵味方の死屍の山や負傷者の苦痛の叫び、修羅の巷の恐ろしさがつくづくと思はれた。太刀を引き抜き、奮進敵に迫り兵を指揮する中、少し小高い処から、不意に「！と大喝して打ち下した太刀風に、あつと思ふ間もなく深く肩先に斬り込まれた。

身体の自由を失つた彼は、人数にまぎれて其場を退き、附近の農家に救ひを求めた。賊の詮索が次第に急になり、ここを遁れることは飛鳥に非ざる限りは叶はかつた。彼は茅屋の主の情によつて、床下に深く隠さ

れた。この有様で日々砲声を聞きながら、傷の痛さをこらへつつ、苦しい時日をここで送った。砲声は次第に遠くなり、附近には賊影を認めなくなったので、漸く縁の下から這い上った。其の青天を望んだ時の喜ばしさは、今に忘れることができない。かう言つて、彼は又茫然として往時を追懐するやうに、うつとりと燈火を見つめて居た。

枯葉が又一しきり、さっと窓に打ちかかった。

世田ヶ谷御所

三軒茶屋の角の石の不動尊は、暖かさうに春の朝日を受けて往来を眺めて居る。其の下の臺石に、左二子道、右登戸道と御家流の書風で太く彫り付けられてあるのが、江戸時代の淋しい街道の有様を想ひ起させる。

渋谷からここその道は今では玉川電車の道筋であるのと兵営が移転して来たのとで、両側にすきまなく人家が建ち並んで、東京の場末町のやうになったが、私の子供の頃には、大坂あたりには凄いやうな森があり、沿道は田畑や櫛の並木が続いて、ただ池尻・太子堂などの村々に、茅屋がまばらに道端に見えるに過ぎなかった。今でも大坂下の氷川神社の高い松の樹や、太子堂辺の櫛の林などは、僅に昔の面影を偲ばせて居る。

不動尊に向かつて右手を真直ぐに世田谷宿の方へ行くと、都の塵がまだ惨みこまない、昔の儘の淋しい田舎道になる。近頃迄渋谷辺が丁度こんな有様であつたことを考へると、東京の膨張が此の二十年来如何に劇しくなつたかに驚かされる。

角から三四町も行くと、道の両側がすこし家続きになつて、中には素封家らしい邸の門の内に子手鞠が雪のやうに白く咲いて居たり、玄關の脇に櫛の大木が新緑の枝を一面に廣げてゐたりなどする。

此の辺に南向きの暖かさうな蹄鉄屋がある。奥には、炎土から真赤に火花が飛んで、鞆の音が幽かに聞こえる。黒ずんだ壁には、鉄槌・箸・

釘抜などの種々の器具や蹄鉄が一面に掛けてあり、仕事場の真中には鉄砧や蜂の巣台など据えてあつた。

此の小さな鍛冶場の前には、こはれかかつた涼み台の端に、経木の破れ帽子をかぶつた馬方が、太い煙管で煙草を吹かしながら鍛冶屋と話して居た。傍らの櫛の木の幹には、近頃都では余り見かけない真白な馬が、蹄鉄を附け換える為に繋がれてゐた。

軒下には木きな白鸚鵡が、粗末な円い籠の中から外を見廻して、お早うだとか、或は何だかわからぬ人語らしいことを囁りながら、止り木を右から左へ、左から右へ、絶えず足を運ばせて居る。十二三の子守娘が背中の赤ん坊をゆすりながら、鳥に戯れると、鳥は大きな鳴声をして威張つて居た。

此の辺からは左側に駒留八幡の森が茅屋根の上に青黒く見える。世田谷宿の方へ向つて行くと、人家が次第にまばらになつて、道の両側に廣い畑が続き、其の末には森が何段にも重なつて見える。

右側に御首のない不動尊の石像が立つて居るすぐ先に、小さな石橋がある。橋の上面と幅とが道路と同じであるので、一寸其の上を歩いただけでは、橋のあるのに気がつかない。

此の小さな石橋について憐れな伝説があるのである。昔足利の末世に、其の一門の吉良家は世田谷に城を構へて、世田谷御所と稱へた。其の何代目かの頼康と云ふ殿様の室に常盤の前といふ佳人があつたが、其の周圍を抽んでた美しさが、御殿女中中間の瞋恚の焰を盛んにした。彼の女はかうした恐ろしい嫉妬や反目の中に、優しい心を苦しめてゐたが、ある夕暮、遂に不義の疑ひのため此処で失はれたと伝えられる。その時から此の小橋は常盤橋とよばれるやうになつたのである。

里人は此の薄幸な佳人に同情して、彼の女の霊を弁才天と崇めた。今上引澤の駒留八幡の鳥居の前に、細い水に環らされ、太い藤蔓などに絡まれた老樹の陰鬱な蔭を落してゐる小島の上に、粗末な祠のあるのが彼の女の芳魂を祀つた処であると伝えられて居る。

苔に蒸した祠の庇に垂れ掛かる薄紫の藤の花房は、彼の女がありし世

の艶麗な面影を偲ばせて、遠い昔のことなどがさまざま胸に浮んでくる。また誰がささげたのか、絵馬の胡粉や丹の色彩が幾年の雨露に酒されて落剥して居るのが、如何にも佻しいものであった。

駒留八幡の境内には常盤の松ぐと云ふ古松があつて、此の可憐な美姫を記念して居る。

夕陽が紫の雲の蔭に沈んで、遠くの森や茅屋が灰色に霞んで見える頃、かうした寂しい田舎道の小橋の上に立って往時を考へると、何とも云はれぬ悲哀を感じずには居られない。

常盤橋から二三町行くと、世田谷の宿に着く。宿の入口から北方を見ると松陰神社の鬱蒼とした新緑の森が遙に畑の末に浮ぶ。

世田谷は乙字型になつて、上町下町と呼んで居る。此の長い宿は、道路の両側に人家がぼつぼつ続いて、其の間には森や立木が茂る。中には昔の代官や庄屋の大きな邸も其儘残つて、江戸時代の栄華を偲ばせて居る。

十年以来玉川電車が開通したので、駒澤や瀬田方面の大山街道は繁華になつたが、これに反して本宿の方は火の消えたやうに寂しくなつて、今では全く廃駅の面影を見せて居る。世田ヶ谷御所の隆盛の頃にはどんなに繁盛したのであらう。歴史を読み伝説を聞く毎に、今昔の感に堪へられぬのである。

此の寂しい長駅には毎年十二月十五日と一月十五日に定期の市が立つ、これはぼる市と言つて昔から名高く、近在からも都からも盛んに人出がある。店は道の両側の軒の前につらりと並んで、新古のあらゆるものを商ふのである。此の市の起りは世田ヶ谷御所の盛時にあつて、その遺風が今日に及んでゐるのである。

世田ヶ谷の市のことは、当時の古文書などにも見えて、戦國時代に我が国に於ける有数の市の一つである。信長が嘗て安土の上下町に楽市を許したと同じやうに、北條氏は此処に自由市を置いて城下町の商業の発達を奨励したのであつた。

上町を突当たつて田圃道へ出ると、右手の田の中に、こんもりとした

大きな森の茂る一郭が見へる。これが近郊で有名な豪徳寺である。

此の辺には小川が清流をなし、岸は青々として如何にも美しい。春は芝の間から草木瓜が朱色の愛らしい花を出し、紫の菫があちこちに頭を擡げ、蒲公英が黄金の花を一面に見せて、時々足下の算の間から、雲雀が面白さうに歌ひながら、真直に桔梗色の高い空へ舞上るのも長閑である。

南の方から小橋を渡つて、だらだら坂を登ると、右側が御所の跡である。突当りには白苔が蒸した古い金堂が見える。堂前の両側には楓の古い並木があり、秋になると一面朱色に染められて錦のやうである。

金堂は二重家根の古い建物で、軒に三世佛と書いた由緒ありげな額が掲げてある。前庭には大きな絲櫻の古木があつて、初春の頃淡紅の一重の花が、しなやかな垂枝に一面について雲のやうに見える眺めや、又はぼんやりと霞んだ夕暮に、古色蒼然とした清浄な沸殿の前に、入相の鐘に此の花の散る風情を見ては、如何にも静な山寺の春の景色を十分に味あふことができる。

沸殿は廻廊で庫裏や客殿に続く。其の周囲は翁鬱とした大森林で、境内は全く世塵を離れた霊地である。

御所の遺跡は一面に畠となり、南や東は田に臨んで居る。周囲には小高く土塁が巡らしてあつて、あちこちには空彫りが残つて居る。堀の中には雑草が一面に繁茂した所もあるが、場所によつては、水が満々と湛へて、葦の花が白く見えたり、河骨が黄金のやうに咲素出でて、昔の榮華を偲ばせて居る。

時の室町將軍の一門であつた吉良の勢力は、かなり大きなものであつたらう。この土塁や濠で囲まれた中には、金殿玉楼があちこちに建てられて、林泉の美も完全であつたらう。又御所で催さるる盛宴や詩歌管弦の會のをりをりには、高樓からさす燈火の影、場内に起こる琵琶・笛の音など、如何に城下町の人々の注意を惹起こしたことであらう。

私は或夕暮れ、この城址の畠の中に立つてあちこちを眺めた。廻りには夕霧につつまれた鬱蒼たる森が紺色に霞み、勝光院の木立の上に烏が

群れをなして鳴いて居た。日は西の林に落ちかかって空を白桃色に染め、畠や田に出て居った人々は、農具を肩にして向こふの丘や林の蔭に急いで行つた。

私はこの忘れられた史跡の古を考へながら、獨豪徳寺の高い木立の下を過ぎて家路に就いた時、頭上の緑陰から山鳩が二三羽羽音をたてて、塹を求める為か、夕日を受けてぼんやり立って居る、向ここの槻の大木の方へ飛び去つた。

恐縮

(p.40 まで)